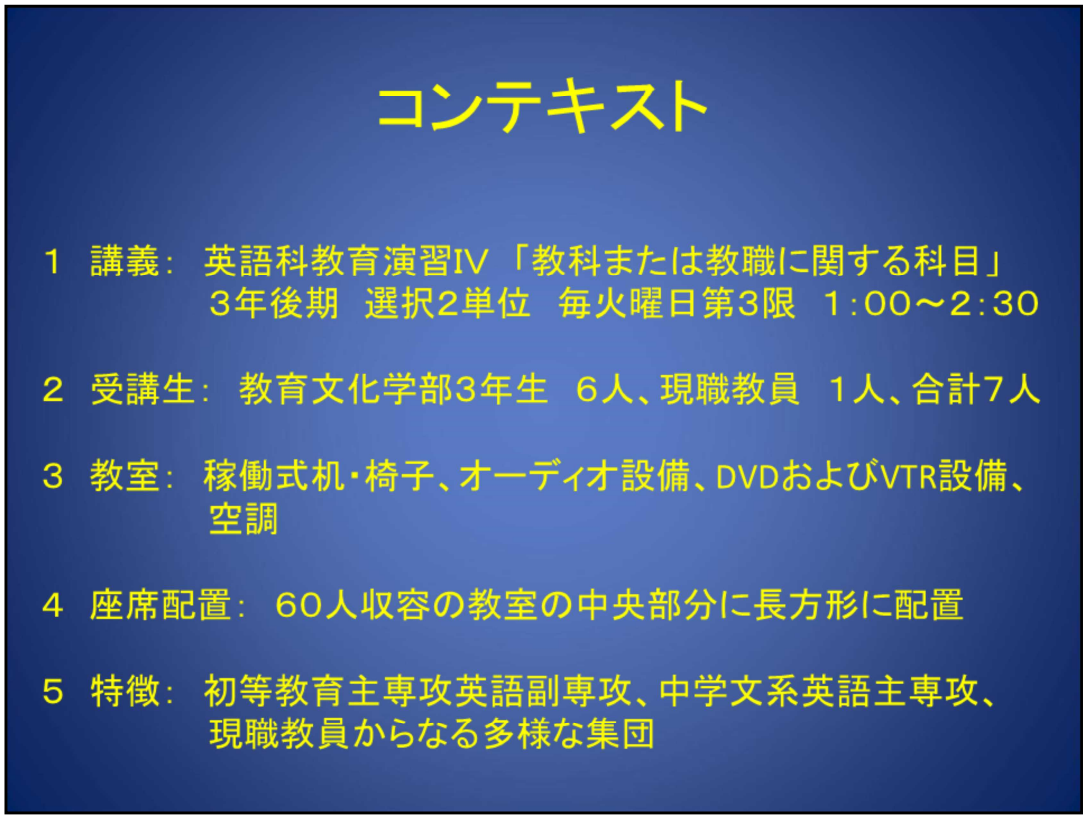
宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

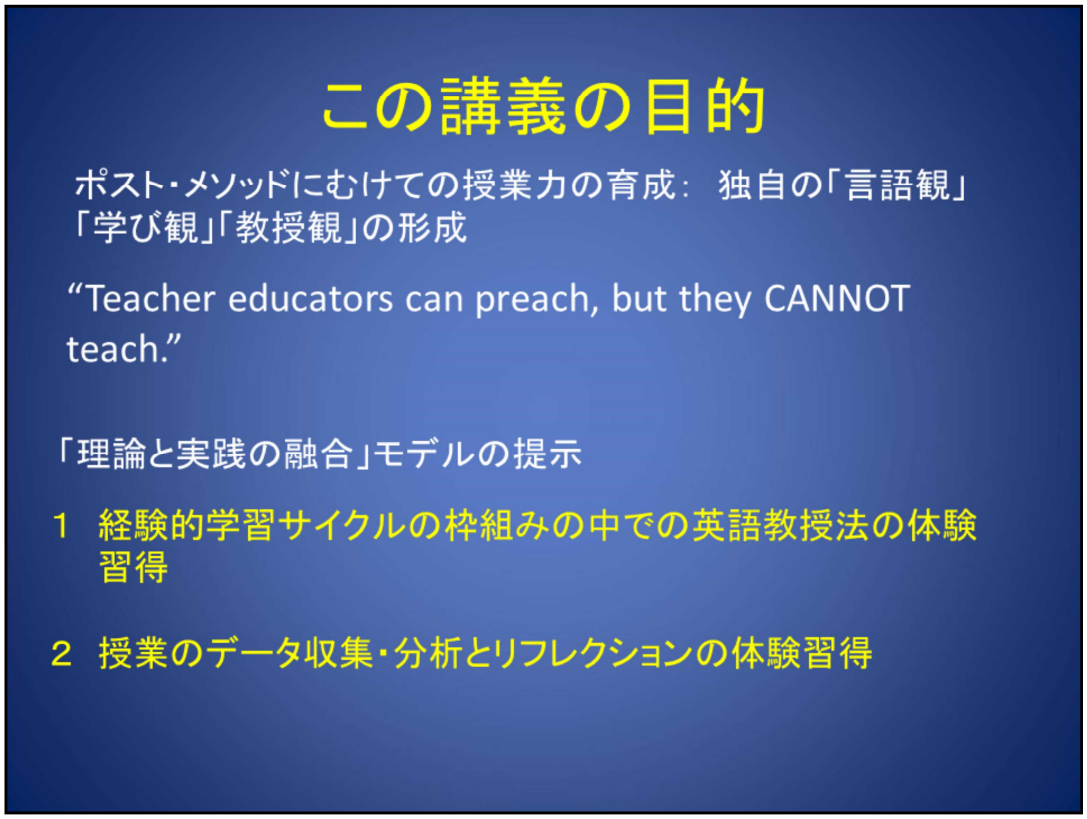
CLT理論に基づく指導法の体験習得を目指して

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 大学英語教育学会
	公開日: 2020-06-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊勢野, 薫, Iseno, Kaoru
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5147

宮崎大学の伊勢野です。本日は実践報告ということで、宮崎大学での教員養成課程での取り組みをご紹介いたします。



この実践報告の対象となる講義の概要を説明します。
この講義は教職課程の中の「教科または教職に関する科目」に属する選択科目です。
開講時期は3年後期で、週一回の講義で単位数は2単位です。受講生は教育文化学部3年生6人と、現職の教員研究生1人の計7人です。
教室は移動式机・いすが配備され、オーディオ設備やDVD、VTRなどの教育支援機器も整備されています。
教室の収容人数は60人なので、授業の前に机を移動させて、教室の中央に長方形の座席配置をしました。
受講生は初等教育主専攻英語副専攻の学生、中学文系英語主専攻の学生と、現職の中学校教員からなる多様な集団であるという特徴があります。



次にこの講義の目的を説明します。一言でいいますとポスト・メソッド時代にむけての授業力を育成するということになります。
英語教授法は時代とともに変遷を遂げてきましたが、それぞれの教授法は独自の「言語観」「学び観」「教授観」に基づいております。これからの英語教師に求められるのは、これらの教授法の理念を実際の教育現場での状況に合わせて授業を組み立てていく、ポスト・メソッドの授業力であるといえます。そのためには養成段階で各教授法の体験学習を積み、将来教職に就いた時に自分の教育現場に対応できるような授業デザインをするための、独自の「言語観」「学び観」「教授観」を身につける必要があります。

養成段階での教授訓練不足にはいろいろな要素が考えられますが、そのなかでも教師教育に係る大学教員の指導力が問題であります。よく
“Teacher educators cannot teach what they preach.”
と言われますが、大学教員は、各教授法についての歴史や概要を説明できても、それを養成段階の学生に対して「理論と実践の融合」としてモデルを提示し、学生に体験させることをしてこなかった（またはできなかった）ことが、英語教育の改善を妨げてきたといえます。文科省も現職研修には力を入れているようですが、こと英語教育に関しては養成段階での研修は各大学まかせであるといえます。

このような認識に基づき、養成段階の学生に、経験的学習サイクルの枠組みの中で英語教授法の理論の学習とその実践を体験習得させるということと、模擬授業とデータ収集・分析によるリフレクションの体験習得をこの講義の目的としました。

次にこの講義で扱ったCLTの内容を説明します。
１５回の講義を４期に分け、第１期ではここにあるような古典的なCLT活動をまず体験させることにしました。

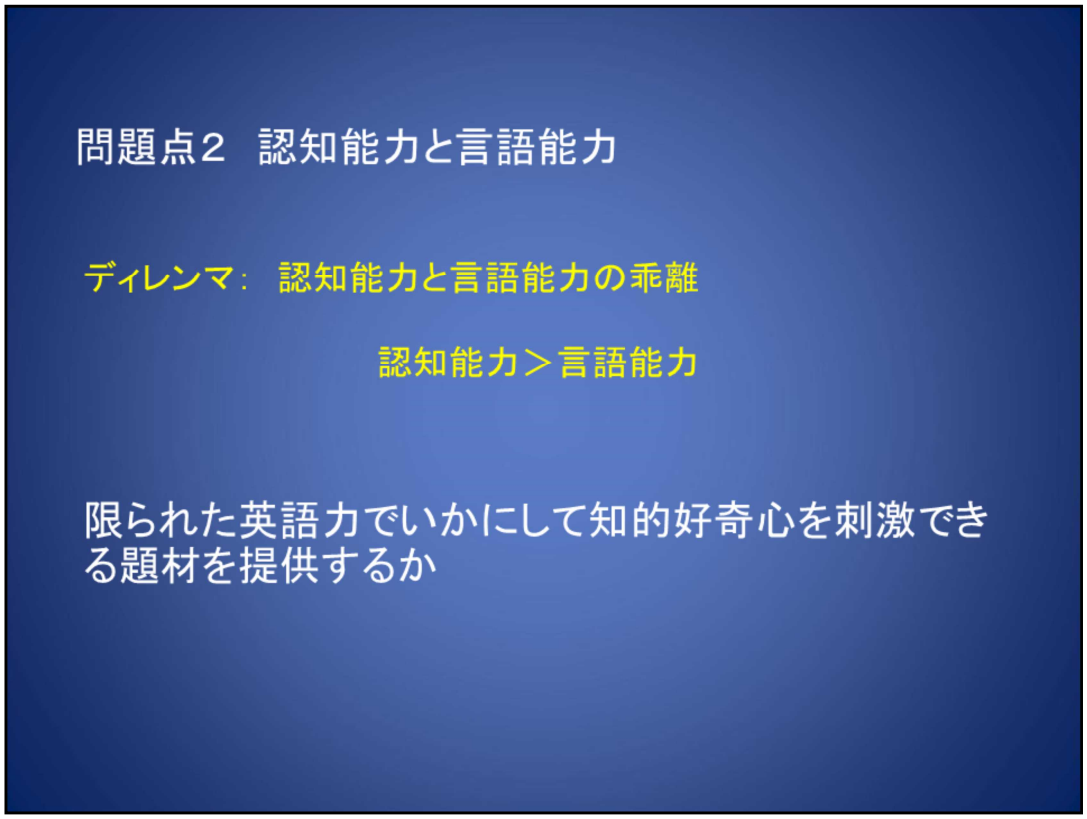
第２期から第４期は現代のCLTの体験学習を目指し、第２期はCBI，第３期はTBI、第４期はミニレクチャーによる教材開発とプレゼンテーションを習得目標にしました。

なおCBIやTBIについては、定義や内容などに統一された見解はいまだに確立されてはいませんが、ここではCBIを教科内容中心教授法、TBIはCBIに具体的なプロダクトを完成させるもとを目的とするものとしておきます。

CLTの基本理念はコミュニケーションを通してコミュニケーション能力を獲得するという点にあります。人はなぜコミュニケーションをするかといえば、そのコミュニケーションがその人のライフ・ストーリーに直接かかわる意味があり、その意味を明らかにするという目的があるからです。したがって教室のコミュニケーション活動もできるだけ学習者にとって意味と目的が感じられるものでなければなりません。そのような活動により学習者のInvestmentも高まるといえます。

もっと簡単に説明しますと、うまくいくCLT活動では学習者が本能的に「意味と目的」を感じ取り、「学び」を実感できるものでなければなりません。そのためには教師自身しっかりとした「言語観」「教授観」「学び観」を形成し、それを実現するための指導技術を習得していく必要があります。

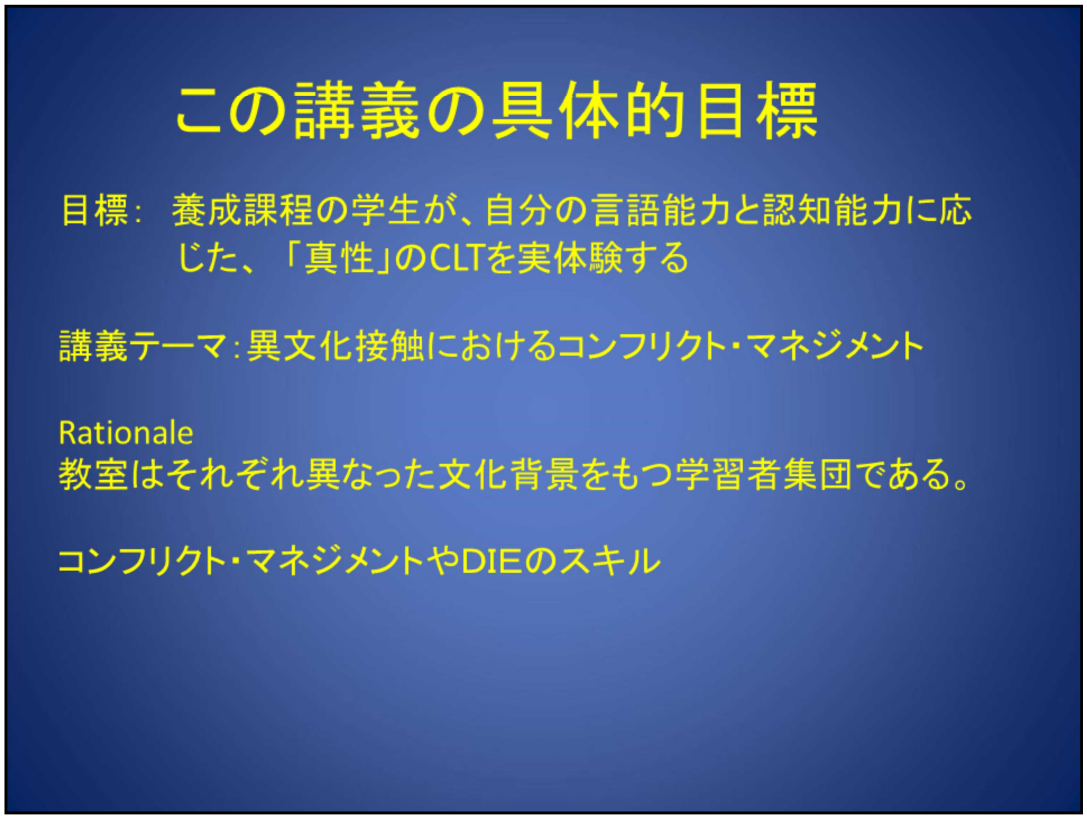
さきほど「練習のための練習ではなく実践のための練習」と言いましたが、この目的を教室で実現しようとするには2つの問題点があります。
一つ目は活動をいかにAuthenticなものにするかということになります。教科書等に提供されているCLT活動は、対象が広く教科書使用者全般であるため、どうしても「架空」の状況という恣意性があるのは避けられません。
そこでこのようなCLT活動を学習者にとってAuthenticなものにしていく教師の授業力が問われることになります。
ここに「真性と恣意性」の連続体がありますが、常に「真性」ということを意識し、教室での活動を組み立てる必要があります。



次に問題となるのが学習者の認知能力と言語能力の乖離です。英語の場合はとくにこの問題が顕著になります。中学高校の教科書やその他の英語教材などをみても、生徒の言語能力が限られているため、どうしても内容が「幼稚」なものになりがちです。つまり内容が「真性」ではない場合が多く、生徒は「練習のための練習」を繰り返すことになりがちです。

英語の教科書編集でもいちばんの悩みが、「知的好奇心」をどのように刺激するかということにあります。

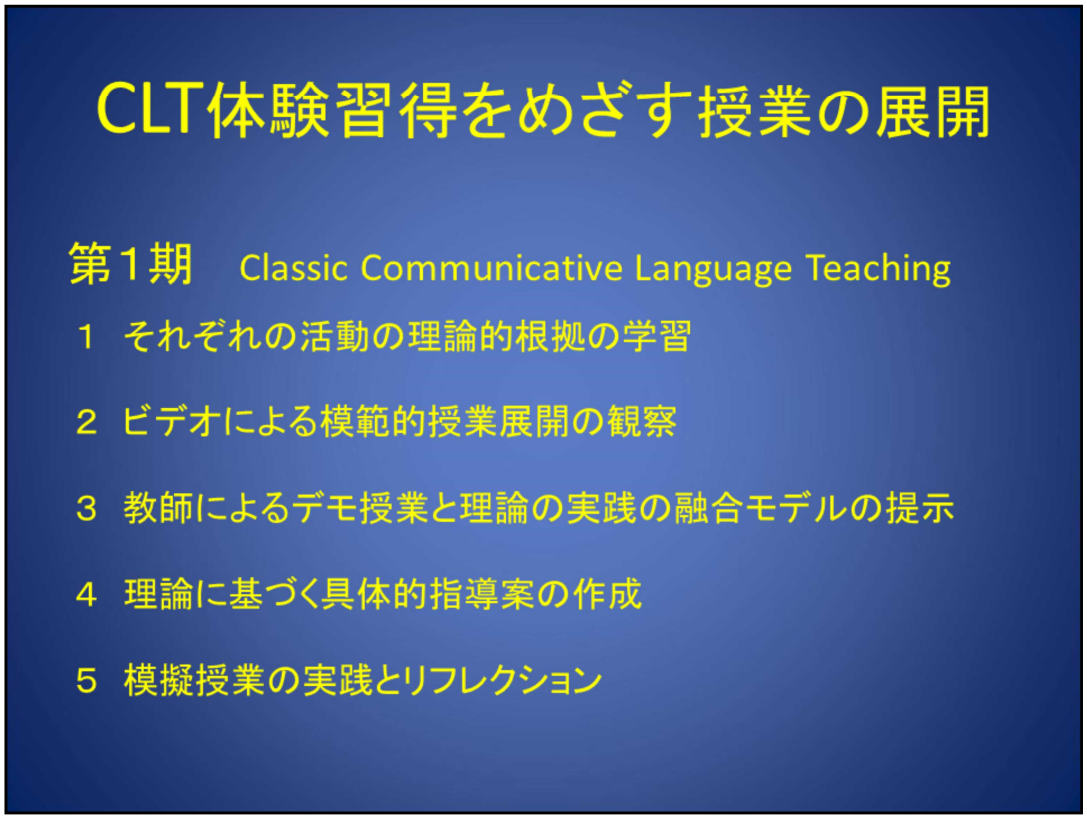
母語である日本語では、はるかに抽象的な概念まで学習できるが、外国語である英語では同じような水準での授業は実現が難しいのは事実です。ここでも教師が学習者の認知能力を常に意識して授業を進めていけば、外国語である英語でも、より高度な内容の授業を実践できると思います。



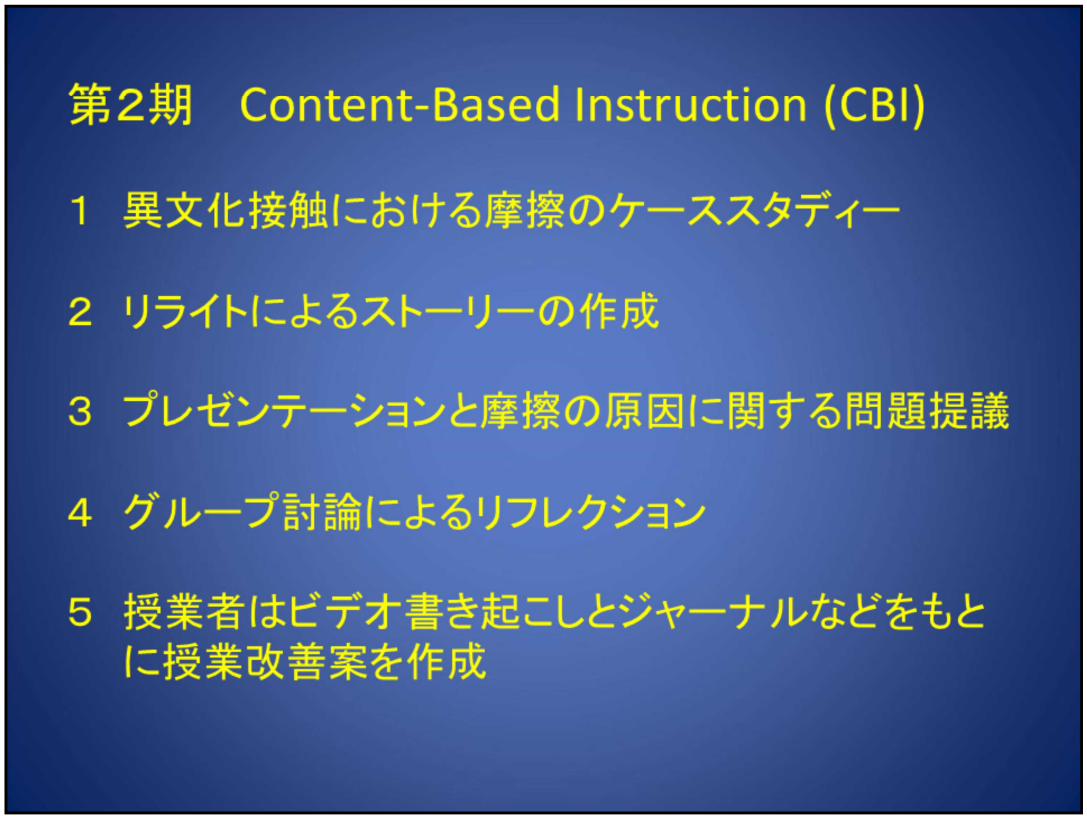
そして、このような2つの問題を解決するための訓練として、受講生の言語能力の範囲内で、できるだけ彼らの認知能力を発揮できるような「真性」のCLTを体験させることを、講義の具体的目標にしました。

テーマとして、異文化接触におけるコンフリクト・マネジメントを取り上げました。このテーマを選んだのは、教室は異なった文化背景を持つ学習者の集団であり、異文化接触のコンフリクト・マネジメントやDIEの理念や手法は、教室での指導に役立つと考えた故であります。

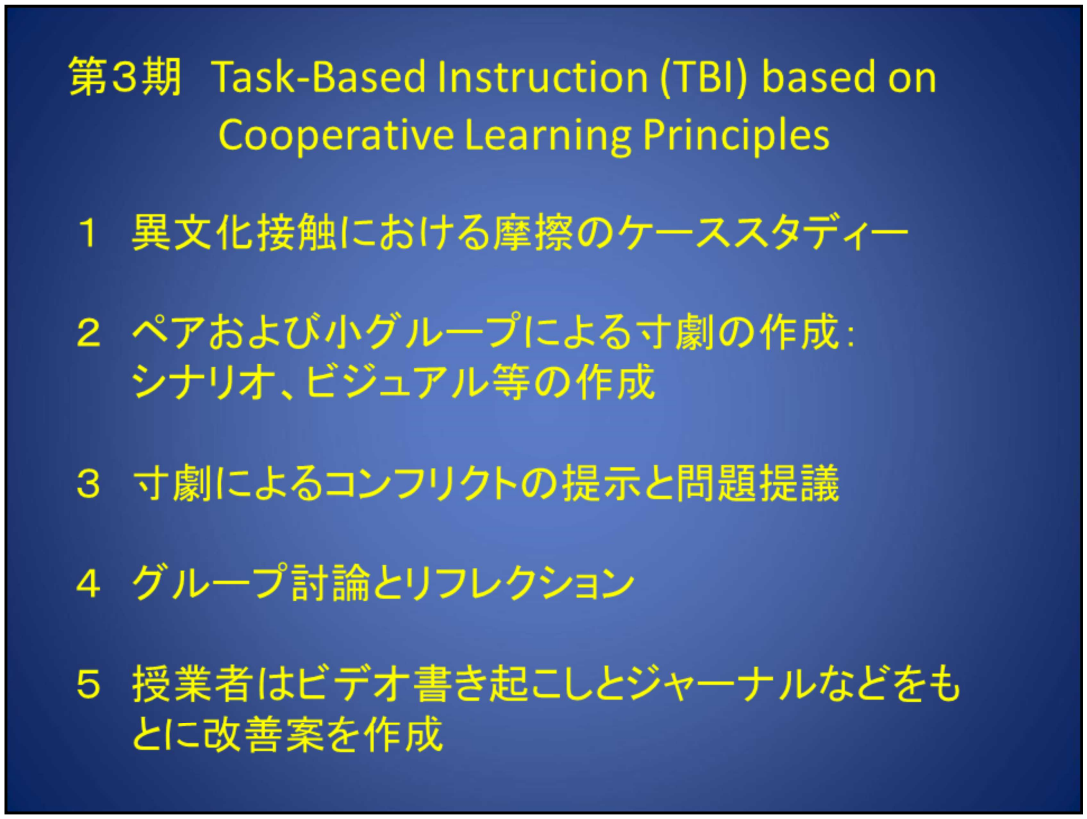
このテーマにそって種々のCLT活動を体験学習させることにしました。教員志望の学生に「真性」のCLT活動を体験させることで、将来、自分の授業で「真性」を実現できるように願っています。



次にこの講義の展開を簡単に紹介します。
まず第１期の古典的コミュニケーション活動の授業の流れです。３回の講義で第１期をカバーしました。

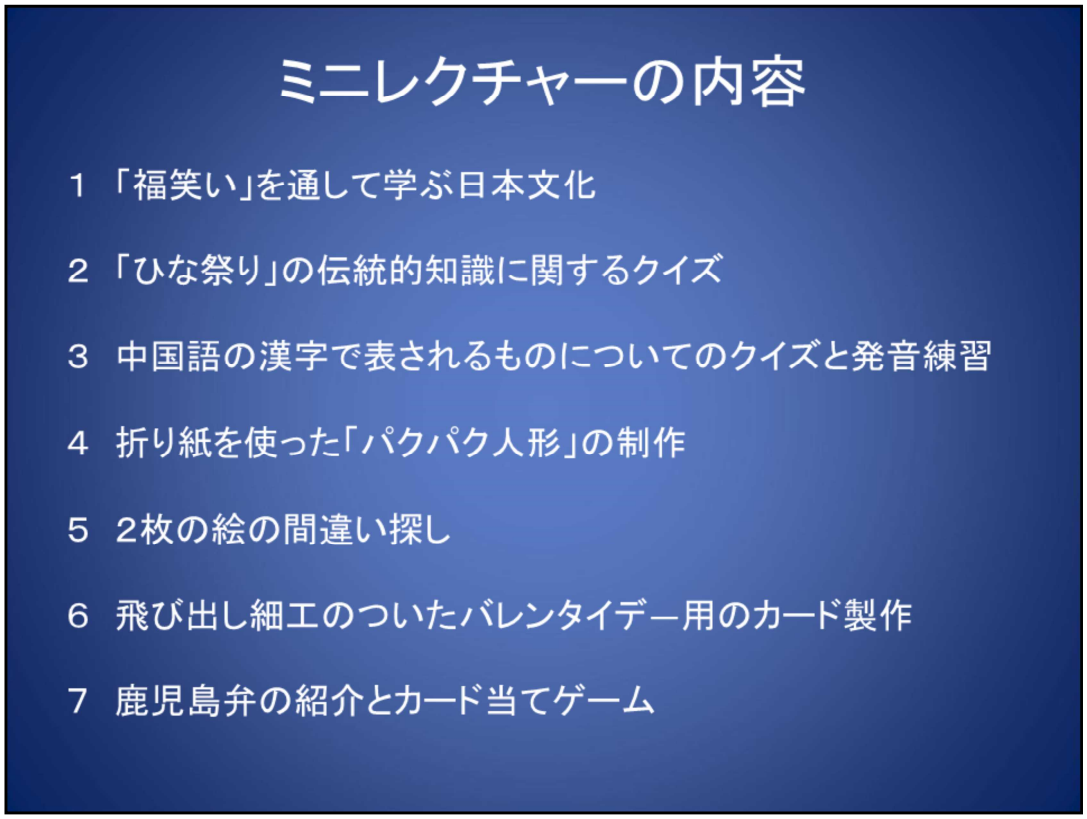


第２期の展開はこのようになっております。時間があれば後ほど学生の作成したプレゼンテーションをご紹介します。第２期以降はそれぞれ４回の講義で、カバーしました。

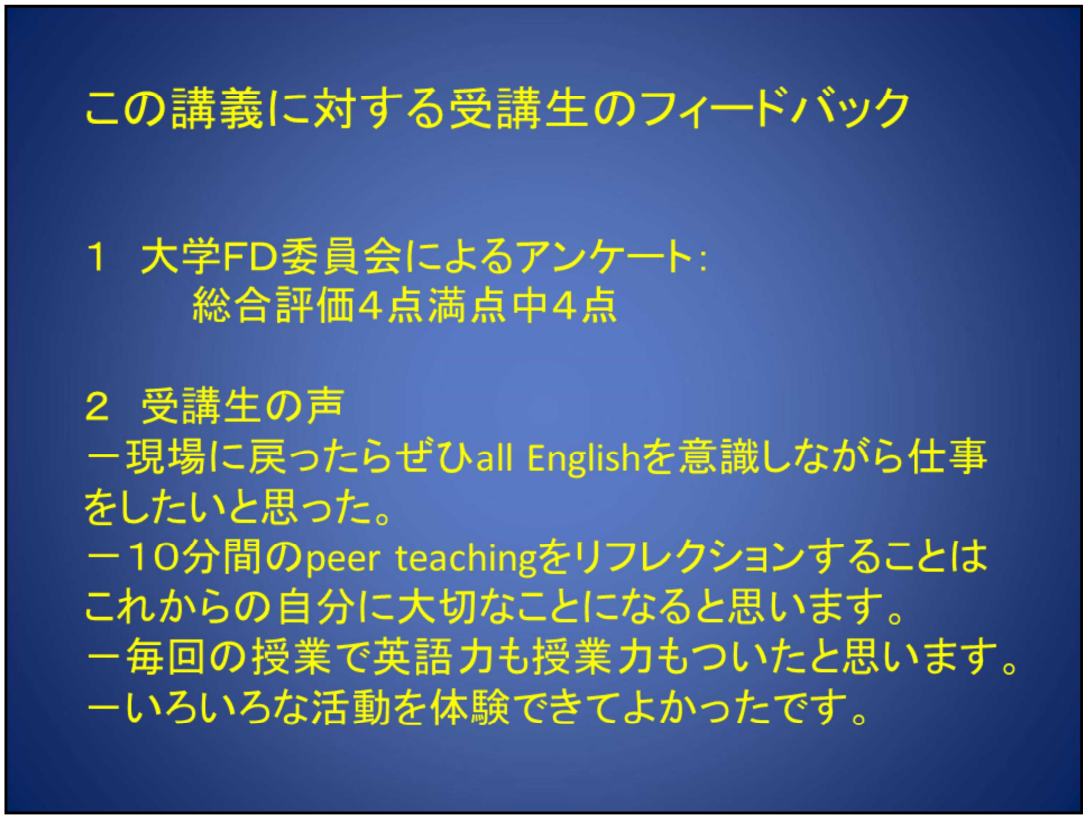


第３期のTBIでは、異文化接触のケースから、ペアまたは３人組の協働学習グループでシナリオを作成し、それを演じるという形で、異文化接触の問題提議をし、全体討論を実施しました。

第4期のミニレクチャーは, ゲパード、オプランディー（1999）を参考に、ミニレクチャーを体験学習させました。その内容は自分の特技を伝えるという形式のミニレクチャーを2回実施し、指導目標の設定、教材開発、指導手順の決定、事後省察といった一連の体験をさせました。



2回目のミニ・レクチャーのタイトルを挙げてみます。



この講義を総括してみますと、CLTの体験学習という目標は達成できたと考えています。模擬授業を重ねるうちに、こちらが思いもよらなかったような創意工夫に富んだ活動を考案し、それとともに授業観察眼も格段に進歩したように思います。今年度の後期もまたテーマを変えて実践していこうと考えております。

最後に授業アンケートですが、本学のFD委員会の実施した授業評価では４点満点で４点の評価をもらいました。また個人的に記述してもらったアンケートでも、高い評価をもらいました。

今後の研究課題としては、今回取り上げた中等教育でのCLT活動をより範囲を広げ、初等教育から高等教育にまで広げていきたく考えております。

A Packed Lunch

An American Boy in Japanese Elementary School

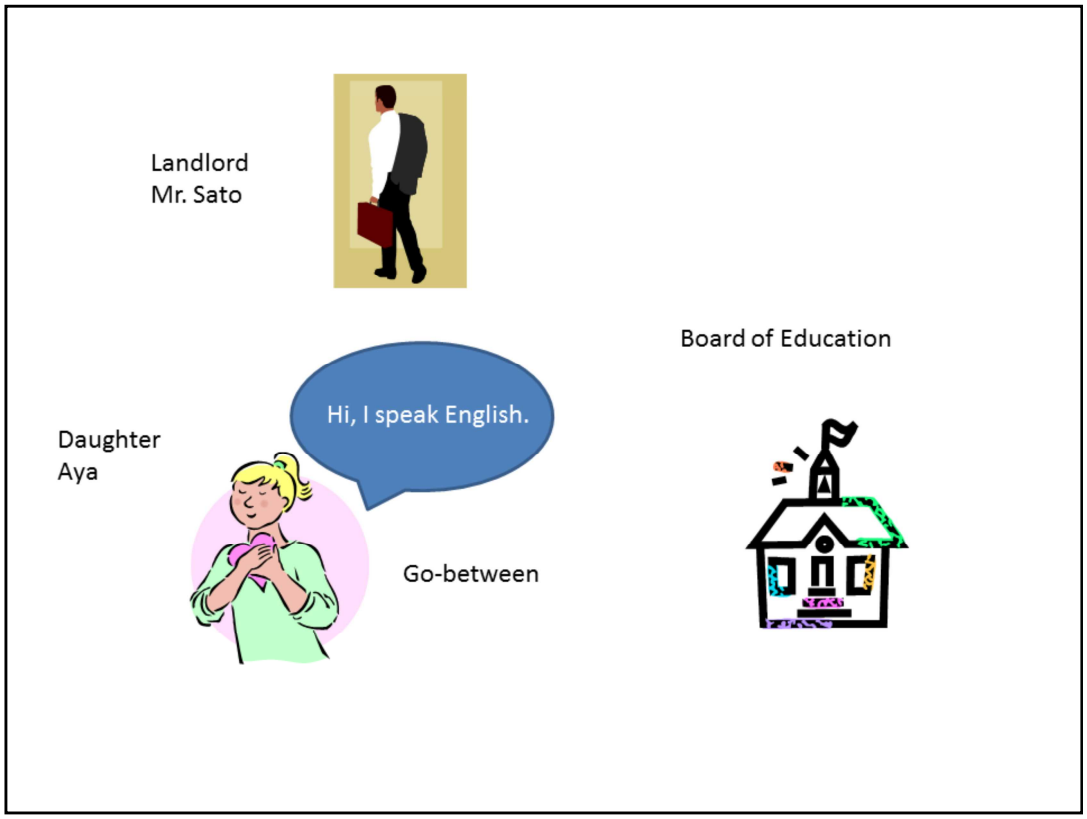
This is a story of an American family living in Japan.

An American Family

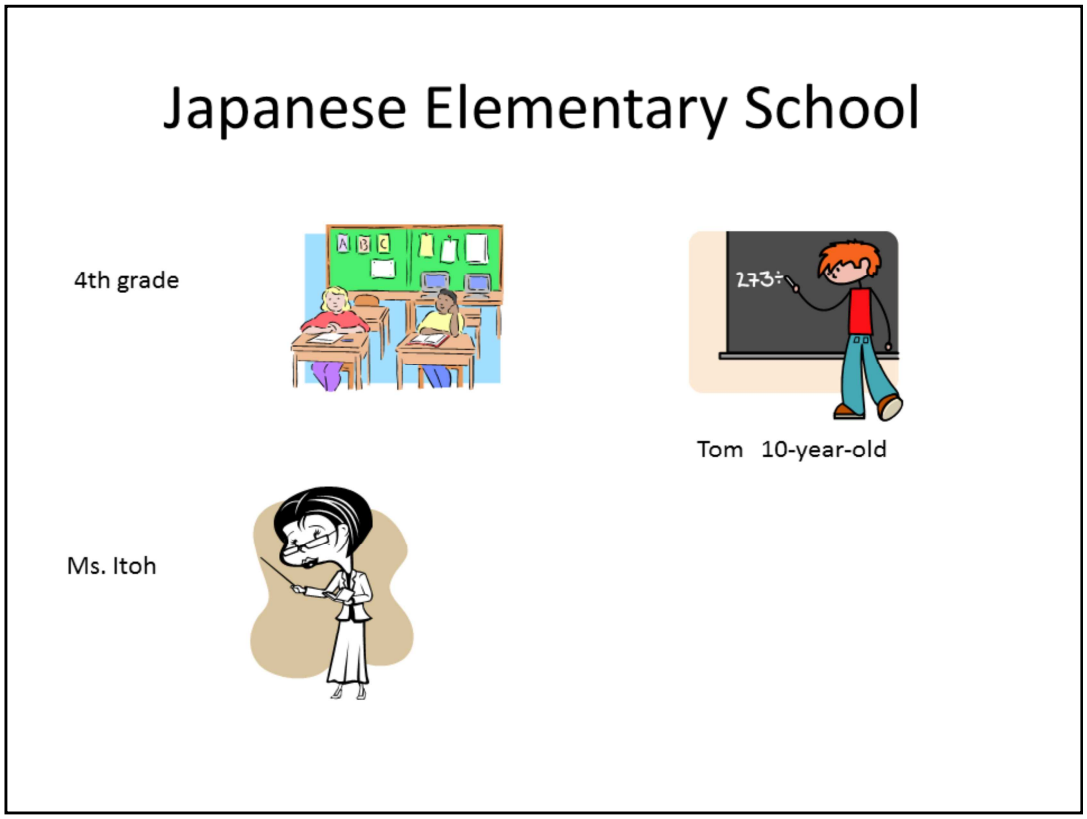
Mr. & Mrs. Jones, Tom, Peter, Paul

Tokyo Branch Office

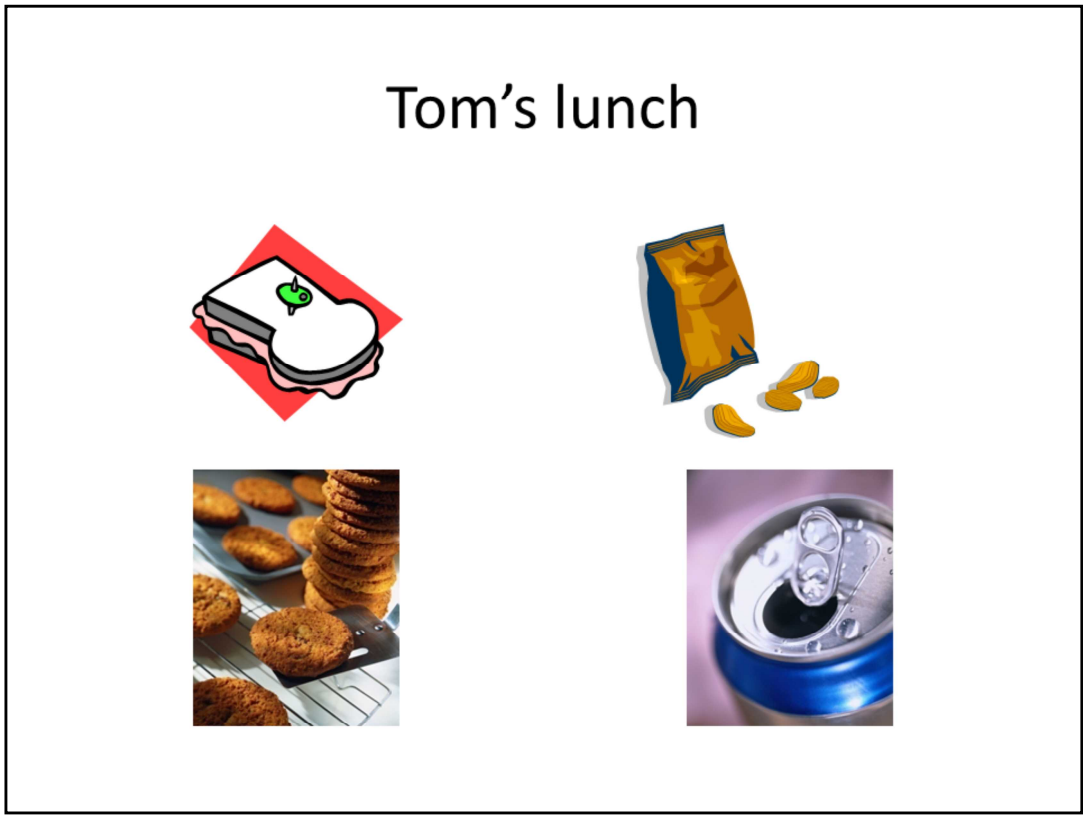
This is Mr. Jones and his wife Sherry, with their three sons, Tom, Peter, and Paul. Mr. Jones is working in Tokyo branch office of an American company, and he will be working in Japan for the next two years.
There is an American school in Tokyo area, but the Jones' decided to send their eldest son Tom to a Japanese elementary school.



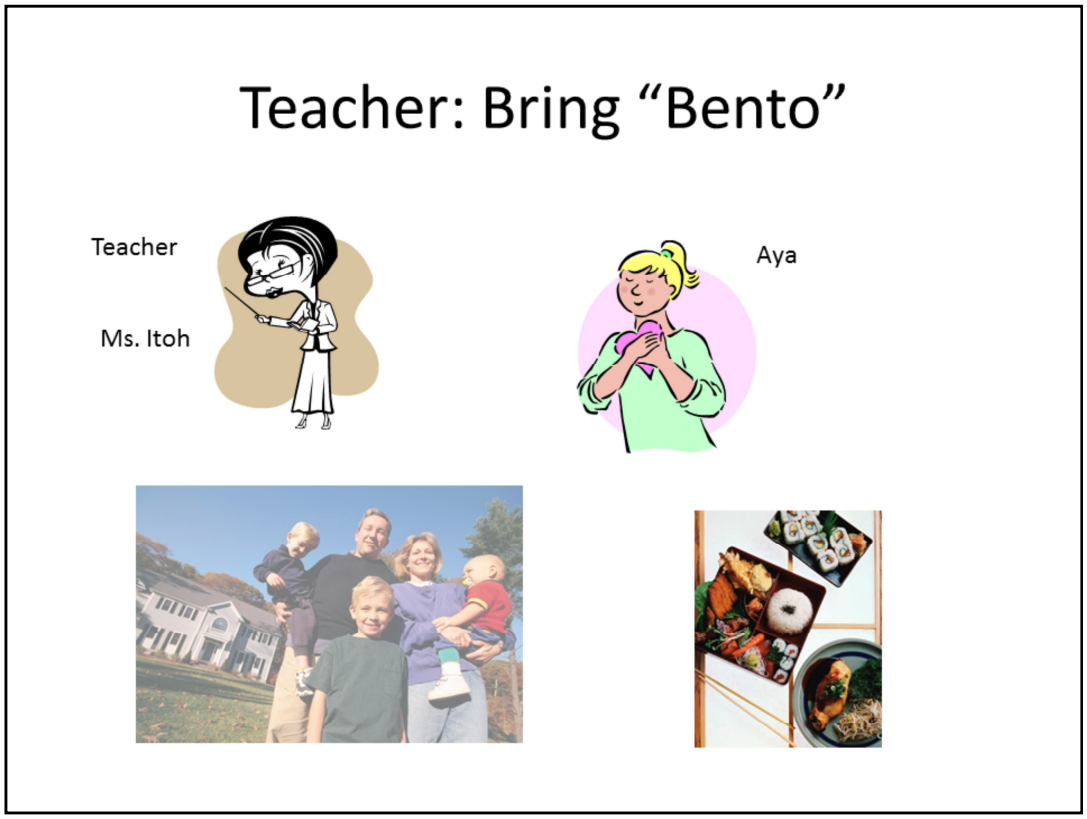
So, Mr. Jones talked to the landlord Mr. Sato and asked him for his help. Fortunately, Mr. Sato's daughter Aya had studied in the USA and she speaks very good English. So, she will be a go-between to negotiate Tom's case with a local board of education.



In due time, Tom was Admitted into a local elementary school and was placed in Ms. Ito's 4th grade class.



Pupils in this school must bring lunch everyday because there is no school meals. So, Mrs. Jones prepared an American style lunch for her son Tom. In the lunch box, she put a sandwich, chips, cookies, and a soda, which are typical American lunch box items.



Tom’s teacher, Ms. Ito, became very anxious about Tom’s lunch and asked Aya to tell Mrs. Jones to prepare Japanese “bento” for Tom instead of an American lunch.

Do you agree with Ms. Itoh?
Talk with your partner.

Which of the followings best explains the situation?

Here is the first question:
Do you agree with Ms. Ito? Why? Why not?
Please talk with your partner and find your own answer.

Next question.
Why did Ms. Ito ask Mrs. Jones to prepare Japanese bento?
Choose the best answer from the four choices.

Why?

- 1 Japanese children will be envious.
- 2 Not nutritious enough
- 3 Against Japanese tradition
- 4 Conformity more than individuality